

境界への問いからオンガク観を形成する

音楽科研究部

1 学習を予定調和にしない

人と音や音楽との自然な関わりにおいて、音や音楽のどの部分を切り取って知覚し、何を感じるかは人によって異なる。このことを前提とする音楽科の学習では、互いの聴き方から得る学びが、合唱のように全員で一つの表現を創り上げる際に一定の共通理解はあっても、全員共通のものである必要はない。

音楽の得手不得手に関わらず、子ども達が互いのアイデアから学び合いながら価値を見つけていくことを目指した昨年度までの授業実践では、教師も常に予定調和で終わらない展開に挑むこととなった。このことは、教師にとって必ずしも指導案通りに進まないという予期不安や自責を生む傾向にある。しかし、人類学者のティム・インゴルド（2025）は、教育＝知識の伝達という伝統的な教育観にとらわれた教育の再生に関して、以下のように述べている。

人々は万人にとって同じやり方のもとで異なるのではなく、すべての存在はそれぞれのやり方で異なるという点において同じなのである。すると教師と生徒は、学んだ者と無知な者としてアカデミックな構えで対峙しているのではまったくない。各々が語るべき独自の物語を持った人々として、仲間としての構えで同じ方向を向いているのであり、ともに乗り出しているものの誰も結末を知らない旅のなかで、お互いに注意を払い、応答し合うのである¹⁾。

彼によれば、子どもは未熟な者ではない存在であり、教師は決まった方法論や手順に頼りきることなく手段を提供し、望ましいものを注入するのではなく、何が望ましいのかを一緒に探究していく存在だという。この考え方は、授業の中で子どもとの自然なやり取りに学習の流れを委ねる教師の背中を押してくれるものである。

さて、本年度からの本校の研究の新しさは、過去の実践を土台としながらも、子ども達が主体となって学び深めた結果より、主体となって学び深めていくプロセスそのものに重点を当てることで、よりよい自分・よりよいものを目指して考え続ける・向き合い続ける態度を子ども達に求めようという方向性にある。では、子どもが主体となって学び深めること、一つの学びを終わりにせず学びを続けるためにはどのようなプロセスで実現できるだろうか。

2 各々のオンガク観を形成する

音楽科では、よりよい表現を目指して試行錯誤を行い、音や音楽の美しさやおもしろさ、混沌などの価値を「教えられる」のではなく「見つける」ものであることは自明のはずである。しかし、教師が設定した目標と指導案に沿う中で教師の音楽観を複製することになっていないか疑わしいところもある。そこで、「音楽観」について、第一に教師は教師の音楽観を持ちつつも、子どもは子どもで自分の音楽観を形成していくこと、またそれは変わりゆくものであると考えた。第二に、音楽は楽しいばかりではなく、臍気ながら感じることや分からなさの質感を含み込むことを意味するために、音楽観を「オンガク観」と表記し、子どもを一人の自立した学習者として捉えて授業を展開した。そして、以下を二つの柱として実践した。

3 境界への問い

授業づくりの柱の一つ目は、題材の根底を貫く問いを設定することである。例えば2年生題材「せいかつの中の音楽を楽しもう」では、「聴こえた（奏でた）音は音楽か」という問いを設定し、音と音楽の境界を問うた。現代音楽の分野では、環境音を素材として使用することは珍しくない。聴こえた時点で音楽だと思うか、自らの手で操作して演奏という形式をとることで音楽だと考えるかは人それぞれであろう。そして、この活動の途中で感じたことや友達の考えからオンガク観は変わることもあり、一つの考えに固執しすぎないように留意することも重要であろう。そもそもドとレの境目はどこか、長調と短調の境目はどこか等、このような境界への問いは芸術の分野においてはいくつも存在するのではないだろうか。そこで、本年度の授業実践では、どちらの考えであってもよいという前提が伝わるように考えの理由を伝え合わせ、各々のオンガク観の現在地を共有することを大切にした。

4 発展に重きを置くこと

二つ目の柱は、発展に重きを置くことである。一つの学びを終わりにせずに学び続けることを実現するために、題材の終末にまず到達させ、全員に身につけさせたい力を保障した。通常の題材の終末で「できた」という感覚を得た子ども達からは、「他にもこれをしてみたい」、「今度はこの楽器でやってみたらどうか」等のつぶやきが出てくる。その自然発生した意欲を出発点として学習を発展していくところに重きを置いて題材を計画することで、一つの題材から多様な視点の学びを引き出すことができ、各々のオンガク観を変容させていく様を見取ることができた。（文責 梅比良 麻子）

引用・参考文献

- 1) ティム・インゴルド『教育とは何か』, 亜紀書房, 2025, p.108